馬を殺したからす

小川未明

青空文庫

北の海の方にすんでいたかもめは、ふとして思いたって南の方へと飛んできました。途中でにぎやかな街が下の方にあるのを見ました。そこにはおほりがあって、水がなみなみと青く、あふれるばかりでありましたから、しばらくそこへ下りて暮らしました。

この街は、この国の一番の都でありまして、人々はそのほりの中にすんでいる魚を捕ることができなく、また下りている鳥を撃つことができないおきてでありましたから、かもめには、このうえなく都合がよく、暮らしいいところでありました。

ほりの中にいる魚は、それは北の海にいる魚の味とは較べものになりません。どろ臭くて骨が堅うございましたけれど、容易に捕ることができましたので、荒波の上で、仕事するように骨をおらなくてすんだのであります。

かもめは、もうずっと南の方へいくという考えは捨ててしまいました。だいいち、人間というものが、ここにいても、すこしも怖ろしくありませんので、水もそのわりあいに暖かであるし、その年の冬は、この街の中で暮らそうと考えました。

かもめは、さまざまな街のにぎやかな光景や、できごとなどを見守りました。そして、こんなおもしろいところがこの世界にあるということを、ほかの鳥らはまだ知らないだろう。よく、よく、この有り様を記憶しておいて、彼らに教えてやらなければならないなどと空想しました。

寒い冬が過ぎて、春になると、ほりばたの柳が芽をふきました。そして、桜の花が美しく咲きました。このころが、都もいちばんにぎやかな時分とみえて、去年の秋以来見なかった景気でございました。

うかうかとしているうちに、春も過ぎてしまいました。子供らがそれでも隠れてこのほりにときどき釣りなどにやってくる夏となりました。いままで、かもめはなんの不足もなく、また考えることもなく暮らしてきましたが、このころからようやく考えはじめました。それは、ほりの水の中にすんでいたかもめは、ふたたび青い、青い、海が恋しくなったからです。風が強く吹いて、波が岩角に白く、雪となってはね上がり、地平線が黒くうねうねとして見える海が恋しくなりました。

かもめは、北の方の故郷に帰ろうと心にきめました。そして、その名残にこの街の中の光景をできるだけよく見ておこうと思いました。ある太陽の輝く、よく晴れた日の午前のことでありました。白いかもめは、都の空を一まわりいたしました。すると、大きな木のこんもりとした社の境内を下になかめました。子供らが豆を買って、地面の上に群がっているはとに投げやっていました。

かもめはそれを見ると、まったく驚きました。都というところは不思議なところだ。ここにさえいれば、遊んでいても暮らしていくことができるのだ思いました。

ついに、このかもめは、北をさして長い旅に上りました。彼は、去年きた時分のことなどを思い出していろいろの感慨にふけりました。高山を一つ越えて、もうやがて向こうに海が見えようとするころでありました。かもめは、一羽のからすに出あいました。

からすはカーカーとなきながら、やはり里の方をさして飛んでゆくところでありました。おしゃべりのからすはすぐ、自分の上を飛んでゆくかもめを見つけて、声をかけずにいられませんでした。

「かもめさん、かもめさん、たいへんにお疲れのようだが、どこへいっておいでになりました。」と、からすは問いました。

すると、かもめは、急ぐ翼をゆるくして、からすとしばらくの間道連れになりました。

「私は二、三日前に、ずっと南の都から出立しました。去年の冬はにぎやかな都で送りました。もう夏になって、北の海が恋しくなったので帰るところですよ。」と、かもめは答えました。

「それは、いいことをなさいましたね。私などは、いつもこんなさびしい田舎にばかり日を暮らしています。いつになったら、そんなところへいってみられるかわかりません。」と、からすは歎息いたしました。

「なんのいけないことがあるもんですか、あなたの心がけですよ。幾日も、幾日も、南をさしてゆけば、しぜんにいかれますよ。」と、かもめはいいました。

「たとえ、そこへいっても、どうして食べていけるかわかりません。石を投げつけられたり、みんなに目の敵にされていじめられるばかりです。」と、からすは身の不運を歎きました。

かもめは、都では、はとがみんなにかわいがられて、子供らから豆をもらって、平和にその日を遊び暮らしていることを話しました。

「どうしてほかの鳥は、みんなそう幸福なのでしょう。」と、からすはうらやみました。

するとかもめは、からすをなぐさめて、いいますのには、

「からすさん、私の見たはとの中には、ちょうどあなたのように、色の真っ黒く見えるのがありましたよ。だから、あなたも知らぬ顔をして、その仲間入りをしていられたら、だれも不思議に思うものはありますまい。ひとつ都にいって、大胆にそうなさってはいかがですか。」と、かもめはいいました。

「そうですか、ひとつ考えてみましょう。」と、からすは答えました。

やがて、かもめとからすとは、別れてしまいました。かもめは海の方にゆき、からすは里の方にゆきました。かもめは、いつしか、昔と同じ生活をしましたけれど、からすは里へいっても、あまりおもしろいことはありませんでした。いつか、かもめから聞いたことを思い出して、

「都へいって、はとの仲間入りをすれば、なにもせんで楽に暮らしていける。」と、考えましたので、ついにその気になって、南に向かって旅立つことにいたしました。

からすは、かもめのように空を高く、また速く飛ぶことはできませんでした。それでも幾日かかって、にぎやかな都に到着いたしました。

「なるほど、にぎやかなきれいなところだ。いつも、お祭り騒ぎをしているところだ。」と、思いました。

からすは、さっそく、社の境内へ飛んでゆきました。するといままで、見慣れない鳥が近くにやってきたので、気の弱いはとは、一時に騒ぎたてました。からすは、これは困ったと思いました。見るとかもめのいったように、黒っぽい色のはともいました。これはだんだん彼らに馴れていかなければならぬと、初めは離れたところで、からすは地面に降りて餌を探していました。

しかし、いくら同じように黒っぽくても、からすとはととは、ちょっと見てもよくわかります。子供らは、からすを見つけると、石

を拾っていっせいに投げつけました。

いろいろのことを思って、茫然としていましたからすは、不意に石が飛んできたので、びっくりして立ち上がりました。そして、木の枝に止まって下をながめますと、子供らは、なお自分を目がけて石を投げるのであります。

からすはしかたなく、その社の境内から逃げ出しました。けれど、どこへいっても、自分を仲間に入れてくれるはとの群れはありませんでした。そして、人間に見つけられると憎まれ、また追われました。ちょうどそのことは里にいたときも同じことです。むしろかえって、都のほうがいっそうひどいように思われました。

からすは、はとの仲間入りすることは断念しましたが、都の空は煙でいつも濁っていて、それに、餌を探すようなごみためがいたって少ないので、そこにいる間は餓えを忍んでいなければなりませんでした。からすは、この都がちっとも自分にとって、いいところではありませんでした。

「こんなことになるのも、みんなかもめのいったことを信じたからだ。」と、彼は、かもめをうらみました。

しかたなしにからすは、ふたたび、自分の産まれた里を指して帰ってゆきました。こんなことがあってから、このからすは、ひとをおだてたり、うそをいって困らせたりすることを喜ぶようになりました。それもまったくかもめの言葉を信じて、とんだめにあった復讐を他に向かってしたのでございます。

ある日、からすは田の上や、圃の上を飛んで田舎路をきかかりますと、並木に牛がつながれていました。その体は黒と白の斑でありました。そして、脊に重い荷をしょっていました。これを見ると、さっそく、からすはその木の枝に止まりました。そして、下を見おろしながら、

「牛さん、牛さん、主人はどこへいった。」と聞きました。

牛は、穏やかな大きな目をみはって、遠方の日の光に照らされて暑そうな景色を見ていましたが、からすが頭の上でこう問いますと、

「俺の主人は、あちらの茶屋で昼寝をしているのだ。」と答えました。

これを聞くとからすは、

「なんて人間というやつは自分かってなんだ。おまえさんなぞは、人間の幾倍となく力が強いじゃないか。なぜこんな綱なんか断ち切ってしまって、山の中へ逃げていかないのだね。山の中へ入りや、草もあるし、水もあるし、木の実もあるし、遊んでいて楽に暮らしてゆけるじゃないか。そして、獣物の王さまにならないともかぎらないじゃないか。」と、おだてました。

牛は黙って、からすのいうことを聞いていましたが、なんとなくそれを信じることができませんでした。

「いったい、そんなことができるだろうか。」といいました。

「なんでできないことがあるものか、おまえさんたちは臆病なんだ。」と、からすはいいました。

「先祖代々から、まだそんな乱暴なことをしたものを聞かない。」と、牛は答えました。

「やればできたんだが、みなおまえさんのような弱虫ばかりだ。」と、からすはいいました。

人のいい牛も、ついに腹を立てずにはいられませんでした。

「小さな癖に、なまいきをいうな。」と、上を向いて太い鼻息を吹

きかけますと、からすはびっくりして、
「ばか、ばか。」と、悪口をいって逃げ去ってしまいました。
からすは、ついに牛をおだてそこないました。そして野や、圃の上を飛んできますと、今度は一ぴきの馬が並木につながれていました。その馬は脊の高い、まだ年若い赤毛の馬であります。からすはさっそく、その木のいちばん下の枝に止まりました。馬は、足もとの草を食べていました。
「お馬さん、お馬さん、あなたがほんとうにかけ出したら、どんなに疾いでしょうね。私はあなたのようなりっぱなお馬さんが、こうして綱で縛られているのが不思議でならないのですよ。なぜこんなところにまごまごして、朝から晩まで重い荷をしょわされていなければならないんですか。」と、からすがいいました。
「おまえはだれかと思ったらからすか、よく俺の足が疾いことを知っているな。ほんとうにかけ出したら、どんなものでも追いつけるものでない。けれど逃げ出したって、いきどころがないじゃないか、それとも、どこかいいところがあるというのか。」と、若い馬は問い返しました。
「それはありますよ。だれも束縛するようなもののいない、そして、暗い夜というようなものもない、まったく自由で、一日明るい昼ばかりのよい国がありますよ。」
「それは、いったいどこだ。」
「それですか、西の紅い夕焼けのする国です。毎日、あなたはその方を見るでしょう。いつもその方を見ると、愉快にはなりませんか。」と、からすはいいました。
「愉快になるよ。俺は夕焼けの方を見るのが大好きだ。けれど、そんないい国があるなどとは知らなかった。おまえは、ほんとうにいって見てきたのか。」
「私は、太陽の近くまでいって見てきました。」と、からすはいいました。
「太陽の近くへ？　真紅だろうな。しかしおまえは翼があるからゆける、俺には翼がない。」と、馬は悲しそうに答えました。
「そのかわり、疾い脚があるじゃありませんか。どんなところでも、あなたなら飛び越せないことはありません。」と、からすはいいました。
「たいていのところなら飛び越せるつもりだ。」と、馬は答えて、しばらく考えていました。
からすは、今度はうまくやったなと、高いところへ飛んでいって、じっと馬のすることを見ていました。すると、馬は不意にはねだしました。そして脊中に積んであった荷物をみんな落として、綱を切り放って、野となく林となくかけてゆきました。からすは、馬がしまいにどうするか空を飛んで従いてゆきました。馬はついに林や、野や、おかを越えて、海の辺りに出てしまいました。日はようやく暮れかかって、海のかなたは紅く、夕焼けがしていました。馬はじっとその方を見て、かなたの国にあこがれながらも、どうすることもできませんでした。
「やってみろ！　おまえならこの海を飛び越せるだろう。」と、このとき、空でからすがいいました。
馬は、ほんとうにそうかと思いました。そして、一思いに海を飛び越そうとはね上がりました。けれど、二間とは飛べず、海の中に落ちて死んでしまいました。これを見たからすは、

「あほう、あほう。」といいながら、飛んでいってしまいました。

その年の暮れ、大雪が降って寒い晩に、からすは一つの厩を見つけて、その戸口にきて、うす暗い内をうかがい、一夜の宿を求めようと入りました。するとそこには白と黒のぶちの肥った牛がねていました。

「おまえは、いつかのからすじゃないか。あのとき、おまえのおだてにのって山の中へ入ってみろ、この大雪に、どうして安らかにねることができるか。おまえのようなうそつきには、宿を貸してやることはできない。」と、牛は追いたてました。

からすは、大雪の中をあてもなく、そこから立ち去ったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　1」講談社
　1976（昭和51）年11月10日第1刷発行
　1982（昭和57）年9月10日第7刷発行
初出：「おとぎの世界」
　1919（大正8）年8月
※表題は底本では、「馬《うま》を殺《ころ》したからす」となっています。
※初出時の表題は「馬を殺した烏」です。
入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班
校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班
2011年11月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

馬を殺したからす

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/